

J. S. バッハの無伴奏チェロ組曲

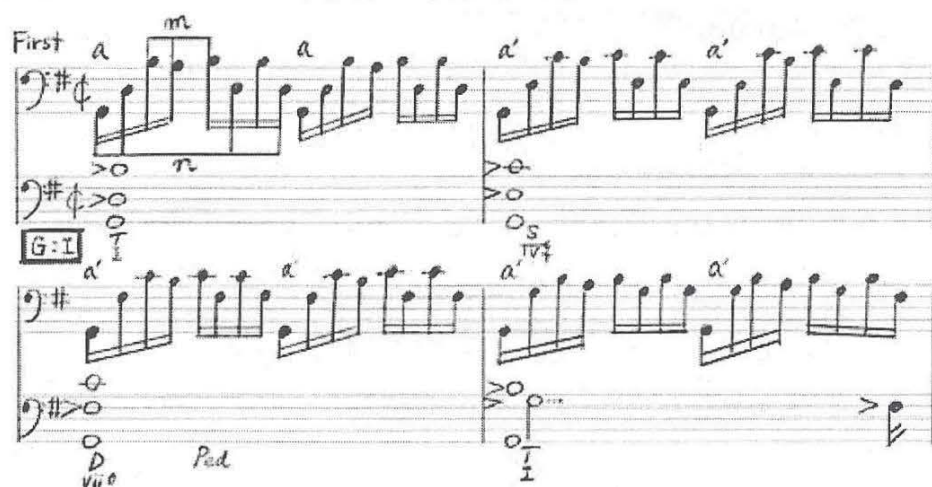
七條めぐみ 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士前期課程（音楽学領域）

6月17日木曜日、アメリカ・インディアナ大学音楽学部名誉教授（音楽理論）のアレン・ウィノルド氏とチェリストのヘルガ・ウィノルド氏を迎えて特別講座が開かれた。講座ではヨハン・セバスティアン・バッハ（1685-1750）の《無伴奏チェロ組曲》より〈第1番 ト長調 BWV1007〉が取り上げられ、ウィノルド氏による作品分析のレクチャーと、ヘルガ夫人による演奏が行われた。音楽学コースでは、講座に先立ちウィノルド氏の著作『バッハのチェロ組曲 Bach's Cello Suites』を講読し、彼の分析方法について学ぶ時間を設けた。まずはこの著作の内容とウィノルド氏の分析の特徴について述べたい。

1 『バッハのチェロ組曲』紹介

本書は作品の成立背景および分析についての第1巻と、譜例集の第2巻から成る。第1巻の序文では、本書が様々な読者に向けられており、学術、実践の両面で有用であることが述べられている。具体的には、チェロを始めとする演奏家にとっては、独自の解釈の構築、研究者や教育者にとっては、伝統的な分析方法の意義の再発見、音楽愛好家にとっては、作品のより深い理解に役立てられる。第1巻の構成は1. 歴史的背景 2. プレリュード 3. アルマンド 4. クラント 5. サラバンド 6. 付加舞曲 7. ジグ 8. 要約と結び となっている。つまり、《無伴奏チェロ組曲》の各曲が順番に紹介されているのではなく、楽曲の種類に従って章が組み立てられ、各楽曲の性格を的確に知ることができる。第2章から第7章にかけてウィノルド氏は個々の楽曲分析を行い、とりわけ第2章と第3章において彼の分析方法の概要を記している。彼の分析は形式、和声、旋律の3要素からのアプローチによる伝統的手法に則ったものであるが、それぞれの要素を機能 function と特徴 feature に分解することで、立体的な分析となっている。一方で、ボウイング、強弱など演奏方法に関することは言及されておらず、あくまで作曲法

ここで、ウィノルド氏による分析の具体例を紹介したい。なお、分析における概念を表す語句は適宜‘ ’で記した。譜例は〈チェロ組曲第1番〉よりプレリュードの冒頭4小節である。大譜表のうち、上段がチェロの原曲、下段は和声的に重要な音のみを記した‘ハーモニック・リダクション’の楽譜である。1小節目上に書かれたFirstは楽曲形式の機能的な名称であり、プレリュードの場合は形式の区切りに2nd, 3rd、他の楽曲ではBeginning, Middle, Endingという名称が付けられている。下段下の枠内に書かれたG: Iは主調であるト長調を示し、曲の途中に書かれている場合はその時点で移行した調性を示す。‘ハーモニック・リダクション’の下に書かれたアルファベットとローマ数字はいずれも和声の分析であり、アルファベットは音楽学者フーゴー・リーマン(1849-1919)による分析方法に基づいている。第1小節目のTはトニック、Iはト長調の1度の長和音であることを示し、前者は和声の機能的な分析、後者は和声の特徴的な分析である。上段のパートに書き込まれた小文字のアルファベットは旋律の特徴的な分析で、同様の旋律型に従ってa, a', b, b'のように分類された‘メロディック・ジェスチャー’と、順次進行や跳躍進行などの音型に応じてmやnなどの記号が付けられた‘サブ・ジェスチャー’により構成される。‘ハーモニック・リダクション’に付けられたアクセント記号は‘ステップ・ライン’と呼ばれるもので、旋律に含まれる音の中で曲の進行にとって特に重要なものを示す。このように、ウィノルド氏の分析では伝統的な手法が踏襲されつつも、その表現の方法に独自性が見られる。



mixed muses no.6 113

2 特別講座報告

このような事前学習を踏まえて迎えられた特別講座は、6月17日木曜日10時30分から、愛知県立芸術大学オペラ・アンサンブル棟、中リハーサル室にて行われた。音楽学コースのほか弦楽器を始めとする他専攻の学生、更には学外からの来場者も多く、会場は満席となっていた。まずアレン・ウィノルド、ヘルガ・ウィノルド両氏が紹介され、アレン・ウィノルド氏より、この講座のコンセプトである理論と実践の関係性について説明された。音楽理論とは、グイド・アドラー（1855-1941）により音楽学が歴史的音楽学と体系的音楽学の2部門に整備された後、後者の中から生じた概念である。‘理論’には歴史的に3つの定義が存在するが、近代以降の学術的な場において問題となるのは「事実あるいは現象の説明として把握されたアイデアの体系」と見なされるところのものである。ウィノルド氏はこれを音楽に置き換えて‘音楽理論’として認識し、それが演奏、解釈の方法に重大なヒントを与えるという立場を取っている。最初の大規模なバッハの伝記を執筆したニコラウス・フォルケル（1749-1818）は、バッハが音楽の理論と実践の緊密な結びつきを重視し、とりわけ音楽における秩序、関係性、均衡を重んじていたと述べている。この三者はそれぞれ、ウィノルド氏の分析における機能、特徴、形式に置き換えられ、彼の分析の概念がバッハの言葉に根ざしていることが分かる。



レクチャーをするアレン・ウィノルド氏と通訳の安原先生

その後、実際に〈チェロ組曲第1番〉の演奏を交えながらレクチャーが行われた。前述の『バッハのチェロ組曲』では作曲法に着目した詳細な分析が主体であったのに対し、講座では分析を踏まえた上での望ましい演奏法に重点が置かれていた。〈第1番〉を構成する全ての楽曲が取り上げられたものの、第1曲プレリュードのレクチャーが最も充実していたため、ここでは主にプレリュードについて紹介したい。まず、ヨハン・マッテゾン（1681-1764）によるプレリュードの定義が紹介され、この曲の即興的な性格について説明がなされた。その後、《平均律クラヴィア曲集》より〈第1番 ハ長調〉のプレリュードが引き合いに出され、〈チェロ組曲第1番〉

のプレリュードと冒頭4小節の和声進行が似通っていることが指摘された。具体的には、前者のプレリュードではローマ数字を用いた和声の特徴的分析結果がI—ii—V—Iとなり、後者ではI—IV—vii—Iとなる(転回形省略)。これに対し、アルファベットを用いた和声の機能的分析結果は両者ともT—S—D—Tとなる。T(トニック)は帰着、S(サブドミナント)は準備、D(ドミナント)は緊張の機能を持ち、4小節の中に起承転結が生まれる。受講者はヘルガ氏の演奏に合わせてTの部分で着席し、Sの部分で前傾姿勢となり、Dの部分で立ち上がることで、一連の和声の流れを体感した。こうした試みは、演奏とレクチャーを組み合わせた今回の講座ならではのものだったといえる。一方、旋律の分析に関して、ウィノルド氏は‘モチーフ’に代わる概念として‘ジェスチャー’および‘サブ・ジェスチャー’を使用することを述べ(譜例参照)、演奏の際には曲中で繰り返し使われる‘サブ・ジェスチャー’を弾き手が意識する必要があると指摘した。

こうした理論と実践が合体したレクチャーの内容は、演奏に携わる学生にとっては分析により裏付けされた事実を演奏に役立てる糸口として、音楽学の学生にとっては事前に学習した分析内容をより実感をもって理解する手段として大いに役立ったことが考えられる。そして、今回のような講座を参考として、今後私たちがより広い視野で音楽に取り組めるようになることが求められるだろう。



チェロを演奏するヘルガ・ウィノルド氏

書誌情報

Winold, Allen. Bach's Cello Suites, Vol.1&2, Indiana University Press, 2007